

学科 こどもの生活学科	所感
氏名 松井素子	初年度ということもあり、ペースが掴みづらく、対応が後手に回ったことも多かった。次年度は、より学びごたえのある授業展開に努めたい。

家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。

イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。

ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。

ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、こどもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することができる人材を育成することである。

1 教育の責任

授業)	科目名	学科	開講期	受講者数	備考
愛知学泉大学家政学部こどもの生活学科の教員として2024年度の1年間、主に教科教育を担当した。その中で、2024年度はオムニバス科目を含めて合計14.5科目を担当した。右の一覧表のうち、教職必修科目は、幼稚園教諭および小学校教諭を目指す学生が教職教養を身に着ける授業である。教職教養は、教師の人格を形成する土台に位置づくものである。 その他) 海外大学との国債交流関連、就職指導、学生指導、オープンキャンパス模擬授業等	こども生活学概論	こどもの生活	1年前期(2024)	35	必修科目
	保育内容(表現B)	こどもの生活	2年後期(2024)	48	教職必修科目 保育選択科目
	こども表現(図画工作A)	こどもの生活	1年前期(2024)	35	教職必修科目 保育必修科目
	図画工作研究A	こどもの生活	2年前期(2024)	30	教職必修科目
	図画工作研究B	こどもの生活	3年後期(2024)	6	教職選択科目
	図画工作教育法	こどもの生活	2年後期(2024)	45	教職必修科目
	他5科目				

2 教育の理念と目的

特に、本学における教育の理念とは、学生一人ひとりの潜在能力を最大限に引き出し、自律的な学習者へと育成することにあると考える。研究者であり教育者でもある大学教員の役割とは、単に最先端の教育知識を伝達するだけではなく、学生が主体的に学びを深められるような刺激的な学習環境を創出し、多様な視点を提供することである。

本年度の私が担当した授業評価アンケートの結果からは、学生が計画性、創造性、主体性といった能力の発揮に課題を感じている現状が示唆されている。この現状を踏まえて、学生がこれらの能力を育成できるよう、授業設計を不断に見直し、改善していく必要があると痛感した。具体的には、学生が自ら課題を発見し、解決策を考案するような能動的な学習活動を取り入れ、多様な表現方法や協働作業を通じて創造性を刺激する機会を提供することが重要だと考える。また、学生の主体的な学びを促すために、興味関心に基づいたテーマ設定や、学生同士の学び合いを促進するグループワークなどを積極的に導入したい。

さらに、教師は、学生の言葉に耳を傾け、その意図や背景にある考えを理解しようと努めるべきです。対話を通じて学生の気づきを促し、自己教育力を高める支援を行うことが、教師の重要な役割であることより、学生が自身の学びを振り返り、成長を実感できるよう、形成的評価を積極的に取り入れ、具体的なフィードバックを提供したい。

教師自身の成長もまた、学生の育成に不可欠である。常に自身の教育実践を省察し、授業評価アンケートの結果や学生からのフィードバックを真摯に受け止め、より質の高い教育を目指して自己研鑽を続けることこそが、教師力の育成に繋がると考える。

3 教育方法

授業においては、教員養成系の学科として、学生が主体的に学び、将来の教育現場で応用できる実践的な力を養うことを重視している。成績報告書には「成果発表」の評価項目があり、これは学生が自ら学びを深め、表現する機会を提供していることを示唆している。また、「学修態度」の評価項目には主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力・創造力、発信力、傾聴力、柔軟性・状況把握力、規律性、ストレスコントロール力といった多岐にわたる要素が含まれており、これらは講義形式に留まらない多様な教育方法を通して育成を目指しているものである。

教員養成という観点からは、これらの要素は学生自身が教育者となる上で不可欠な資質であり、授業を通してこれらの力を意識的に涵養することを目指している。新しい文科省の試みや世界的な STEAM 教育、情動教育の流れを踏まえ、今後はさらに体験型学習やグループワーク、ディスカッションを取り入れ、学生が多様な視点から教育について考え、理解を深めることができるような授業展開を行う。

4 授業改善の活動

現在の授業改善は、学生の成績や学習態度といったデータに基づいて行われている。成績報告書には、小テスト、レポート、成果発表の評価が記録されており、これらの結果を分析して学生の理解度や課題を把握し、次期以降の授業内容や方法の改善に役立てている。特に、成果発表の評価が高い学生が多い一方で、レポートや試験の評価にばらつきが見られる場合、授業内での知識の定着や理解を深めるための工夫が必要であると考えられる。

教員養成科目においては、教員自身も常に最新の教育理論や実践方法を学び続けることが重要であり、学会への参加や文献研究などを通して、自分自身の指導力の向上に努めている。新しい教育動向を踏まえ、授業内容や評価方法を常に見直し、学生が主体的に学び、社会の変化に対応できる教員となるための支援を今後も続けていく。

5 学生の授業評価

学生の授業評価については、教員への評価の他に、定説ではあるが、成績という形で教員地震へのフィードバックとして把握することもできる。成績報告書に示されている「合計」点や「評価」、各評価項目の内訳は、学生の学習成果を測る指標となる。例えば、「成果発表」の評価が高い学生が多い場合、その授業活動が学生に意欲的に取り組み、学習効果も高いと考えられる「学修態度」等の各項目の評価は、授業への取り組み方や姿勢を示すものであり、これらの情報を総合的に分析することで、授業のどの部分が学生に理解されやすく、どの部分に課題があるのかを把握することができる。

教員養成の観点からは、学生自身の学びを振り返り、自己評価する力も重要であるため、今後は授業内での振り返り活動や意見交換の機会を設け、多角的な視点から授業評価を行うことを検討していく。

6 学生の学修成果

例) 上記の授業方法と改善により、「問題解決能力が高い学校教員の育成」を意識し、より高い将来の自分を目指すように促す学生中心の授業展開を考慮したことで、最初は難しく思える内容でも次第に学生の理解が進むような授業を仕組むことができた。授業での学習が進むにつれて、自律的に学び出す学生が出てきている。そのような反応としては、「初めは内容が難しく理解できなかったが、だんだんとわかるようになった。」や、意欲の喚起を示す「毎回書いたレポートを個別で添削してくれるのはやる気を出させてくれた。」という感想を引くことができる(添付資料7)。

7 授業科目に関連した教材開発

教員養成の観点からは、時代の変化や教育現場のニーズに対応した教材開発は重要な取り組みである。例えば、新しい文科省の指針や STEAM 教育、情動教育の考え方を反映した教材や、学生が主体的に学ぶようなワークシート、グループワーク用の資料の開発を行っている。また、近年重要性が増している ICT を活用した教材開発も視野に入れて、コマドリアニメの動画の作成を授業に取り入れている。

近年、視覚イメージを作ることが苦手なアファンタジア*に関する研究が進んでいるが、美術教育、図画工作教育の中で非常に重要な研究となっている。学生が将来教員として、多様な学習ニーズを持つ子どもたちに対応できるよう、教材のバリアフリー化や個別最適化に向けた研究も進めていく必要性も強く感じている。

(*アファンタジアは Zeman 博士によって提唱された概念で「実際に目の前にある物や人の知覚（見たり、聞いたりすること）は機能しているが、心的イメージの形成が難しい」特質のことを言います (Zeman et al., 2015)。ここで、心的イメージというのは「目の前に物や人は存在しないのに、それを心のなかで体験することができる感覚類似経験」のことである。たとえば、目の前にリンゴはない状況で「リンゴを思い浮かべてみて」と言われれば、多くの方はリンゴの「視覚イメージ」を実際に思い浮かべる。しかし、アファンタジアの場合、リンゴのことは知っているし、ことばとして説明できても、実際に視覚イメージを思い浮かべることが出来ないとされる。アファンタジアをバリアフリーの観点で捉える際には、人がどのように物や人を認識しているのか、つまり認知スタイルの多様性と捉えることが必要となってくる。)

8 指導力向上のための取り組み

愛知学泉大学家政学部が主催する FD 研修会に参加し、教育改善の方策のヒントを得ている。

本年度の学外での取り組みでは、具体的には、教育に関する最新の研究動向を把握するための文献研究や、他の教員との意見交換、FD (Faculty Development) 研修への積極的な参加などが考えられます。また、授業アンケートの結果や学生からのフィードバックを真摯に受け止め、授業内容や方法の改善に活かすことも重要な取り組みです。新しい教育の潮流である STEAM 教育や情動教育に関する知識を深め、自身の授業に取り入れるための研鑽を積むとともに、教員養成の質向上に貢献できるよう、積極的に学び続けていきたいと考えている。

本年度は 5 月に、InSEA (世界美術教育学会) Asian Webinar; SDGs and Socially Emotional Learning in Art Education において、“SDGs Art Workshop in Kindergarten and Elementary School, The Open University” の題で学会発表を行った。また、東京学芸大学主催の 2024 年度 広域科学教育学学会大会において「地域連携による造形 PBL 教育のメディアコンテンツ制作における考察」の題目でも発表を行った (『東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 2024 年度 (第 8 回) 広域科学教育学学会大会発表概要集』13 頁 (東京学芸大学))。

さらに、11 月に絵本学会において「絵と言葉が紡ぎ出すイメージの関係」の題目で口頭発表を行った (一橋大学)。特に、「ごんぎつね」の図画工作科と国語科の教科横断的な学びである STEAM 教育の実践について紹介した後、本学での図画工作教育法で学生が描いた作品や考察について発表した。

9 今後の目標

今後の目は、授業における学生の主体的な学びをさらに促進するための教育方法を開発・導入していくことである。具体的には、成績報告書にもある「成果発表」のような能動的な学習活動を増やし、学生が自ら考え、表現する機会を充実させていく。また、STEAM 教育、ESD、情動教育の潮流の要素を教員養成のカリキュラムにどのように組み込むかを検討し、実践していくことも重要な目標である。卒業生が教育現場で直面する様々な課題に対応できる実践的な指導力を身につけられるよう、大学での学びと現場での経験を結びつけるような取り組みを強化していきたい。

10 添付資料

参考資料；愛知学泉大学 DP、HP

アフアンタジア参考文献；[ja](#)

愛知学泉大学ティーチングポートフォリオ